

宇宙生命哲学

ことばはじめ

北里環境科学センター
名誉顧問／宇宙生命哲学者 伊藤 俊洋

32

はやぶさ2が残したもの

昨年の12月、はやぶさ2が往復50億kmの小惑星りゅうぐうからのサンプルリターンの旅を終え、無事地球に試料回収容器（カプセル）を帰還させた。およそ3億km彼方の小惑星の地表に弾丸を打ち込み、生じたクレーターの砂粒をカプセルに充填し、出発から6年の歳月を費やして地球まで届け、はやぶさ2本体は休む間も無く新たな小惑星探査のミッションに旅立っていった。はやぶさ2が再び地球に帰還するのは10年後のことだという。初代のはやぶさ計画がスタートしたのが2003年で、奇跡の帰還を果たしたのが2010年である。このミッションは、世代を超えた多くの研究者と技術者によって引き継がれ、最新の科学・技術が伝承されてゆく。

昨年の2月に始まった世界規模の新型コロナウイルス感染症（COVID-19）によるパンデミックは、人類社会を暗澹たる状況に落ち込ませているが、そんな中に、はやぶさ2の成果は、一条

の光明をもたらしてくれた。正に、日本が誇る基礎研究の成果である。相模原のJAXA本部に、無事カプセルが届いた時の記者会見で、関係者から様々な苦労話や研究秘話が紹介された。このとき、「今回のミッションで、実際の人間社会で役立つような成果、



はやぶさ2によるサンプルリターン
(日本時間2020年12月6日) JAXA HPより

例えば新薬の開発につながるようなものはありますか？」との質問があった。

近年、国家予算編成の際、基礎研究予算を削減し、経済活動に直結する応用研究

が優遇される風潮がある。しかし、近年の多くのノーベル賞受賞者は基礎研究の重要性を強調している。人類が最高の喜びを感じるは、知的好奇心を満足させてくれる出来事に出会った瞬間である。はやぶさ2が残したものは、世界に先駆けて小惑星から持ち帰った研究用試料であることは間違いないが、ミッションを遂行するための新技術、チームワーク、克己心、忍耐力、判断力、そしてこれから得られる新しい科学的知識も貴重な

成果である。

多くの基礎研究の積み上げの上に応用研究の花が咲く。今回のはやぶさ2のミッションは、世代を超えて多くの研究者・技術者によって引き継がれてゆく。その成果を目の当たりにする多くの少年・少女たちは、基礎研究の扉を叩いてくれるだろう。はやぶさ2の快挙が、次の新しい文明の旗手を育ててくれることを切に願うものである。